

〈霏〉の詩想

——大伴坂上郎女「悲嘆尼理願死去作歌」における一表現について——

東 茂 美

一 はじめに

七年乙亥大伴坂上郎女悲嘆尼理願死去作歌一首并
短歌

・たぐづのの 新羅の国ゆ 人言を 良しと聞かして
問ひ放くる 親族兄弟 なき国に 渡り来まして
大君の 敷きます国に うちひさす 都しみみに
里家は さはにあれども いかさまに 思ひけめか
も つれもなき 佐保の山辺に 泣く子なす 慕ひ
来まして きたたへの 家をも造り あらたまの
年の緒長く 住まひつつ いまししものを (a)
・生ける者 死ぬといふことに 免れぬ ものにしあ
れば 頼めりし 人のことごと 草枕 旅なる間に
佐保川を 朝川渡り 春日野を そがひに見つつ

あしひきの 山辺をさして 夕闇と 隠りましぬれ

(b)

・言はむすべ せむすべ知らに たもとほり ただひ
とりして 白たへの 衣手干さず 嘆きつつ 我が

泣く涙 有間山 雲居たなびき 雨に降りきや (c)

反歌

留めえぬ命にしあればきたへの家ゆは出でて雲隠
りにき (d)

右、新羅国尼、名曰理願也。遠感王徳、帰化聖朝。
於時、寄住大納言大將軍大伴卿家、既逕數紀焉。惟
以天平七年乙亥忽沈運病、既趣泉界。於是、大家
石川命婦依餌藥事、往有間温泉、而不会此喪。但
郎女独留、葬送屍柩既訖。仍作此歌、贈入温泉。

右の坂上郎女のうたは、題詞には「悲嘆尼理願死去作歌」と記され、また歌卷の「挽歌」の部立てに編入されている作品でありながら、それでいて(c)の部分を含ませもつがゆえに、歌鑑賞のうえででの正負の評価はともかくも、一般に異色な作品と見做されている。たとえば、反歌に「雲隠りにき」の表現が見え、これからわれわれが「大君は神にしませば天雲の五百重の下に隠り給ひぬ」(巻二、二〇五)、「ももづたふ磐余の池に鳴く鴨を今日のみ見てや雲隠りなむ」(巻三、四一六)、「大君の命かしこみ大殯の時にはあらねど雲隠ります」(同、四四一)などの諸歌を想い起すのは容易である。なぜならば、当該反歌の表現もまた、如上のうたうたと等質の△死△の敬避表現と解してよいからである。併しながら、うた末尾の「我が泣く涙有間山雲居たなびき」に視点を戻せば、ひとつの組み歌においてよまれた「雲」であるにもかかわらず、長歌の「雲」と反歌のそれとはまったく異質であり、齟齬をきたす。両者の表現は明らかに意味的にも心象の差異を孕んでいるのである。だが、こうした差異そのものを歌人の作為とみて、積極的に評価するならば、顕ってくるうた表現は平板でなく、寧ろそこには歌人としての郎女のあらたな試みがうかがえるのではないか、

と思われる。

とはいえ、『評釈』は、長歌に(b)(c)の部分を見ることから、坂上郎女のうたを評して

知性の明らかさと感性の細かさとは相俟って、余裕をもって一首を成してゐるところは、その才情を思はせるものであるが(傍線は稿者)

と述べながらも、「平面的」「散文的な趣を帯びて来て、歌の魅力をなすところの沈潜するもの、又は盛り上って来るものの乏しい物」といっている⁽¹⁾。また『私注』は郎女の「製作者としての態度の不徹底」を指摘して

作者はなまじひに作歌の技巧があり、作歌者としての自意識があるので、どっち付かずのものを作り終ったのであらう(傍線は稿者)

とし、結局のところ「平板な作」と位置づけるのである⁽²⁾。いま、一々の注釈に触れ得ないが、そのうたに対する評の大方は必ずしも芳しいというわけではない。

ここでは、うたの全容にわたってその△読み△を目論むわけではない⁽³⁾。が、先ずは阿蘇瑞枝氏が論じられるように「挽歌的契機により作歌され、表面挽歌としての形を保ちながら、その実際のな面では相聞歌としての性格を多分に有⁽⁴⁾」することを、うたの一特徴としておさえておいてよいであろう。つまり、従来の挽歌表現のうた様

式に学びつつ、それをもって石川命婦への贈歌となし、都城と隔絶した有間温泉に在る命婦との間で、入理願哀悼Vを共有しようとする作歌志向が存在するのである。こうした志向がせりだすが、まさに(○)の部分であるのは、いうまでもないであろう。それにしても、「嘆きつつ我が泣く涙有間山雲居たなびき雨に降りきや」の表現、即ち涙が雲となり、そればかりかやがて雨と降るといふ表現は『万葉集』に類想を見ないうた表現であるように思われる。梶川信行氏はこれを「古今集的なものになり近づいた」表現であり「新しい表現感覚に支えられた発想」とされるのであるが、更に具体的に詳らかにしようとするのが、当面のねらいとするところである。『評釈』の評語をかりていえば、坂上郎女の作歌志向における「知性の明らかなさ」の一偶を、後述する事由から海彼の中国文学を視野にしつつ考えようとすることもある。

二 涙

くりかえせば、郎女は理願死去に遭遇して、「言はむすべせむすべ知らにただひとりして」嘆きながら「涙」に^(○)くれているという。そして、その「涙」は「雲」とたなびき有間山の麓に「雨」となって注いだか、とうたうのである。もとより「死」という局限された情況でなくと

も、悲しみ嘆いて涙するのは常凡な一現象にすぎず、なにも坂上郎女にのみ限ったことではない。併しながら、「涙」はうた表現として『集』に頻出する歌語というわけではないようである。いま「涙」する情況をうたう作品を拾えば、全用例の引用はここでは割愛せざるを得ないものの

- (1) 朝ぐもり日の入り行けばみ立たしの島に下り居て
嘆きつるかも（巻二、一八八）
 - (2) 君に恋ひいたもすべなみ葦鶴の音のみし泣かゆ朝夕にして
（巻三、四五六）
 - (3) 佐保山にたなびく霞見るごとに妹を思ひ出で泣かぬ日はなし（同巻、四七三）
 - (4) ……わきばさむ 子の泣くごとに 男じもの 負ひみ抱きみ 朝鳥の 音のみ泣きつつ 恋ふれども 験をなみと……（同巻、四八一）
 - (5) ひとり寝て絶えにし紐をゆゆしみとせむすべ知らに音のみしぞ泣く（巻四、五一五）
 - (6) 白たへの袖別るべき日を近み心にむせひ音のみし泣かゆ（同巻、六四五）
- といった表現、つまり「嘆き」と「音のみし」泣くといふ表現に拠る場合が、その大半を占めるといってよい。『集』で「涙」をうた表現として直接取り込めるのは、

以下の諸例に限られる。煩を厭わず全例を引いてみたい。

(7) 朝日照る佐田の岡辺に群れ居つつ我が泣く涙やむ
時もなし (草壁皇子舎人群 卷二、一七七)

(8) み立たしの島を見る時にはたづみ流るる涙止めそ
かねつる (同 同卷、一七八)

(9) 梓弓 手に取り持ちて ますらをの さつ矢手挟
み 立ち向かふ 高田山に …玉梓の 道来る人の

泣く涙 こさめに降れば (笠金村 同卷、二三〇)

(10) 妹と来し敏馬の崎を帰るさにひとりし見れば涙ぐ
ましも (大伴旅人 卷三、四四九)

(11) 我妹子が植ゑし梅の木見ると心に心むせつつ涙し
流る (同 同卷、四五三)

(12) 妹が見しやどに花咲き時は経ぬ我が泣く涙いまだ
干なくに (大伴家持 同卷、四六九)

(13) しまたへの枕ゆくくる涙にそ浮き寝をしける恋の
繁きに (駿河采女 卷四、五〇七)

(14) 照る月を闇に見なして泣く涙衣濡らしつ乾す人な
しに (大伴三依 同卷、六九〇)

(15) 妹が見し棟の花は散りぬべし我が泣く涙いまだ干
なくに (山上憶良 卷五、七九八)

(16) ますらをと思へる我や水茎の水城の上に涙拭はむ
(大伴旅人 卷六、九六八)

(17) 彦星は 織女と 天地の 別れし時ゆ いなむし

ろ 川に向き立ち 思ふそら 安けなくに 嘆くそ
ら 安けなくに 青波に 望みは絶えぬ 白雲に

涙は尽きぬ (山上憶良 卷八、一五二〇)

(18) 秋萩に置きたる露の風吹きて落つる涙は留めかね
つも (山口女王 同卷、一六一七)

(19) 妹に恋ひ我が泣く涙しまたへの木枕通り袖さへ濡
れぬ (作者未詳歌 卷十一、二五四九)

(20) 君に恋ひ我が泣く涙白たへの袖さへ湿ちてせむす
べもなし (作者未詳歌 卷十二、二九五三)

(21) 天地の 遠き初めよ 世間は 常なきものと 語
り継ぎ 流らへ来れ 天の原 振り放け見れば……

流るる涙 留めかねつも(大伴家持 卷十九、四一六〇)

(22) 天地の 初めの時ゆ うつそみの 八十伴の緒は
大君に まつろふものと…… 遠音にも 聞けば悲
しみ にはたづみ 流るる涙 留めかねつも (同 同卷、四二二四)

(23) 大君の 命恐み 妻別れ 悲しくはあれど ます
らをの 心振り起こし 取り装ひ 門出をすれば

たらちねの 母掻き撫で 若草の 妻取り付き 平
けく 我は斎はむ ま幸くて はや帰り来と ま袖

もち 涙を拭ひ…… (同 卷二十、四三九八)

(24) ……ちちのみの 父の命は 栲づのの 白髯の上
ゆ 涙垂り 嘆きのたばく (同 同巻、四四〇八)

右のうたうたを一瞥する。(7)(8)は草壁皇子挽歌群の皇子舎人らのうた。(9)は志貴皇子挽歌で笠金村歌集のうたである。(10)(11)は大伴旅人の所謂亡妻悲傷の歌群の二首。(10)も同じく旅人の作。筑紫の遊行女婦児島のうたう水城惜別歌(九六五、九六六)に和したものである。(13)は駿河采女。この人物は伝未詳ではあるが、他に「沫雪かはだれに降ると見るまでに流らへ散るは何の花ぞも」(巻八、一四二〇)のうたを残している。その作風は、旅人の「沫雪のほどろほどろに降り敷けば奈良の都し思ほゆるかも」(巻八、一六三九)や「我が園に梅の花散るひさかたの天より雪の流れ来るかも」(巻五、八二二)に似て、また天平万葉以降に見られる一連の梅花歌群と歌質を等しくしているとみてよいであろうから、大伴家と近しくしていた女人か。(14)は「大伴宿祢三依、別れを悲しむる歌一首」の題詞が付記された一作。『全訳注』は「乾す人なしに」に女性が寓意されているとするが、ならば実態はともあれ恋の悲しき破綻をうたつてみせるうたであろう。(15)(16)は山上憶良のうたで、前者は大伴郎女の逝去に際してうたわれた筑前国守時代の作。後者は七夕歌であり、その左注に「右、天平元年七月七日の夜に、憶良、

天の川を仰ぎ観る。一に云はく、帥の家にして作る、といふ」とある。一本に従えば、これも筑紫においてうたわれたうたであることとなる。(18)は山口女王の作。山口女王も駿河采女と同じく伝未詳の人物ながら、うたは大伴家持に贈られたうたであり、家持を中心とした周縁歌のひとつとして括ることが可能であろう。(19)(20)はそれぞれ作者未詳歌であるものの、その収載された歌巻から推して、新しい時代の作品であるのは周知のごとくである。以上のうたうたをのぞけば、残るのはすべて大伴家持の手になるものである。

こうして見ると、(7)(8)の草壁挽歌二例を措けば、うた表現として「涙」がうたい込められていく在りようには、偏りがあるように思われる。坂上郎女の周辺に在った大伴旅人・大伴家持・山上憶良あたりに集中して見られ、またさうでなくとも、比較的新しい歌巻に拾うことができるのである。ならば、「涙」が歌語として取り入れられていく、いわばうた表現の獲得の契機として、そこに小稿の冒頭に述べたように海彼文学からの受容を想定しても、あながち的外れでもないように思われる。夙に、小島憲之氏が、金村のうたの「泣く涙こさめに降れば」(泣涙霏霏尔落著)について触れ、「念彼共人、涕零如雨」(詩経「小雅」)、「抛鞍長歎息、涙下如流泉」(『文選』

劉越石「扶風歌」、「終日不成章、泣涕零如雨」(古詩十九首)などの表現に学んだものとされているのは、至当であろう。いま少し「涙」に注視して、海彼から表現を撫うとすれば、当時の貴族官人たちが中国恋愛詩のアンソロジーとして、常日その囊中にしていたであろう『玉台新詠集』においても、その表現例は枚挙に遑ない。幾つかを摘記してみよう。

〔A 群〕

- ・涙。為。別。生。滋。(蘇武「留別妻一首」)
- ・俛。仰。淚。流。衿。(張華「情詩五首」)
- ・不。覺。涕。霑。胸。(潘岳「悼亡詩二首」)
- ・收。淚。泣。分。河。(王僧達「七夕月下二首」)
- ・還。淚。已。啼。妝。(何遜「詠七夕」)
- ・貌。在。淚。中。銷。(吳均「去妾贈前夫」)
- ・能。下。班。姬。淚。(蕭繹「夜遊柏齋」)
- ・相。接。辭。閨。淚。(王叔英妻劉氏「和昭君怨」)
- ・零。淚。霑。衣。撫。心。歎。(鮑照「雜詩八首」)
- ・苦。淚。応。言。垂。(虞炎「有所思一首」)

といった具合である。してみると、旅人や憶良らのうた表現は、このような表現を享受し学ぶことよって、生起してくるものと考えられる。ただし、坂上郎女のうたの場合、心情を訴えるべき対象人物の石川命婦が都に不在

で有間山の麓にあり、ふたりの間に地理的な隔たりがあるのに注意される。地理的隔絶を意識しそれを表現化してうたうところから、一案として諸作品のなかでも、「四愁詩」と呼ばれる一群の表現構想に学んだ可能性もあるのではないか。『玉台』から張衡の「四愁詩」を引く。

・我所思兮在太山、欲往從之梁甫艱、側身東望涕霑翰、美人贈我金錯刀、何以報之英瓊瑤、路遠莫致倚逍遙、何為懷憂心煩勞

・我所思兮在桂林、欲往從之湘水深、側身南望涕霑襟(以下略)

・我所思兮在漢陽、欲往從之隴阪長、側身西望涕霑裳(以下略)

・我所思兮在雁門、欲往從之雪紛紛、側身北望涕霑巾(以下略)

張平子の右の作品は、『文選』では後人の手になるとされる序文を併載するが、ここではその作品主題をも坂上郎女が襲っているとするわけではなく、詩的構想の類似である。「四愁詩」の各篇が、訴えようとする人物の居る場所を先ず設定して(太山・桂林・漢陽・雁門)、次いでそこ迄に至る行程の障害を揚げ、路は遠く結局は憂いを抱きつつ「逍遙」(以下「惆悵」「躊躇」「增歎」)し、その心緒は「煩勞」「煩快」「煩紆」「煩愧」しつつ、ついで

に涙を垂れるのである。郎女もまた、理願の死去による哀心を訴えようにも命婦は彼方有間に在って遠く、致し方なく処処を彷徨いながら愁嘆するとうたうのである。

もとより、「四愁詩」の表現と較べると異なる部分もないわけではない。「四愁詩」では先掲した(A)群の表現と同じように「霑」であって、郎女歌のように泣ク涙が雨ト降ルという比喩表現をとってはいない。泣ク涙が雨ト降ル——これを本邦のうたに見れば、時代を下る『古今集』の「涙」を歌材とするうたうたに、近似する表現がある。例えば、

(イ) 春雨の降るは涙かさくら花散るを惜しまぬ人しな
ければ (卷一、春下)

(ロ) 流れいづる方だに見えぬ涙川沖ひむときや底は知
られむ (卷十、物名)

(ハ) 涙川枕流るるうき寝には夢もさだかに見えずぞあ
りける (卷十一、恋一)

(ニ) 包めども袖にたまらぬ白玉は人を見ぬめの涙なり
けり (卷十二、恋二)

(ホ) 世とともにながれてぞ行く涙川冬もこほらぬ水泡
なりけり (同卷、恋二)

(ヘ) 墨染の君が袂は雲なれや絶えず涙の雨とのみ降る
(卷十六、哀傷)

などであって、ここではさまざまに置換されていく「涙」のうた表現を見ることができ(12)。

笠金村歌の表現については、既に小島氏の指摘されるところを触れたが、「涙」を喩として置換させる表現方法が、他ならぬ中国文学に数多いのは留意しておいてよい。幾つか当該部分のみを記せば、「泣涕如涌泉」(徐幹「室思一首」)、「涙下如連絲」(繁欽「定情詩一首」)、「沾妝疑湛露、遠臆状流波」(沈約「昭君辭」)、「涙下如垂露」(曹植「雜詩五首」)、「非独淚成珠、亦見珠成血」(吳均「和蕭洗馬子顯古意六首」)、「空聞淚如霰」(張率「遠期」)、「臉下淚如絲」(梁武帝「代蘇厲國婦」)などは、その例として挙げられよう。それにしても、上記の表現はいずれも「如○○」のような指標比喩であって、郎女歌のような結合比喩的な表現をとるわけではない。更に、中国の詩文から引用する。

〔B 群〕

……喪柩既臻、將反魏京、靈輜廻軌、白驥悲鳴、虛廓無見、藏景蔽形、孰云仲宣、不聞其声、延首歎息、雨泣交頸(曹植「王仲宣誄一首」)

……戒涼在埭、杪秋即窰、霜夜流唱、曉月升魄、八神警引、五輅遷迹、噉噉儲嗣、哀哀列辟、灑零玉瑁、雨洒丹掖、撫存悼亡、感今懷昔、嗚呼哀哉(顏延年

「宋文皇帝元皇后哀策文一首」

……義在奔馳、牽役万里、至心不叙、東望貴舍、
雨淚沾襟、令遣吏并進薄祭、不得臨哀、追贈切裂、
幸損至念、書重不知所言（陸雲「弔陳永長書五首」）

・公子遠于隔、乃在天一方、望望江山阻、悠悠道路
長、別前秋葉落、別後春花芳、雷歎一声響、雨淚忽
成行、悵望情無極、傾心還自傷（昭明太子「有所思」）

『樂府詩集』鼓吹曲辭

その一は、所謂建安の七子のひとり王仲宣（王粲）の早世にあたって、曹植が哀悼の意を表わした作品。右に引用する部分は王粲との親交を回顧しつつ、今や墳墓の主となつた彼に呼びかける件りである。靈車は帰途につき馬は嘶く。かつて王粲が弁じた「儻し独り靈有らば、秦素に游魂せん」（儻独有靈游魂秦素）の言葉を想起して、残された者たちの嘆きが遙か天路に及ばんことを願ひ涙を垂れる。その「涙」を流す形容が他ならぬ「雨」（降雨）によつて表現されるのである。「元皇后哀策文」「弔陳永長書」「有所思」の表現もまた、これと軌を一にする⁽¹³⁾と見てよいであろう。これらはすべて結合比喩である。

三 雲居たなびく

それにしても、坂上郎女歌の特色は、垂れる「涙」の

結合比喩を、嘆くその場で「雨」となり降り注ぐというのではなく、「涙」と「雨」との脈絡に更にもうひとつの結節を設けて、遠く隔った地点で「雲」となりたなびくことをうたっていることにある。⁽¹⁴⁾

さて、『集』に「雲」の例を拾えば、「隱口の泊瀬の山の山の際にいさよふ雲は妹にかもあらむ」（卷三、四二八）、「春日山朝居る雲のおほほしく知らぬ人にも恋ふるものかも」（卷四、六七七）、「白真弓いま春山に行く雲の行きや別れむ恋しきものを」（卷十、一九二三）、「雲だにもしるくし立たば心遣り見つつも居らむ直に逢ふまで」（卷十一、二四五二）など、「雲」の景に響応しつつ心緒をうたいあげたうたは、かなり多い。就中、「雲」がたなびき「雨」が降るといふ現象を直接うたい込めたうたもあって、次のよう⁽¹⁵⁾なうたである。

(25) 葉浪の連庫山に雲居れば雨を降るちふ帰り来我が
背（卷七、一一七〇）

(26) 鳴る神のしましとよもしさし曇り雨も降らぬか君
を留めむ（卷十一、二五一一）

(27) 君があたり見つつも居らむ生駒山雲なたなびき雨
は降るとも（卷十二、三〇三二）

(28) こもりくの 泊瀬の国に さよばひに 我が来れ
ば たな曇り 雪は降り来 さ曇り 雨は降り来…

： (卷十三、三三二〇)

(29) 弥彦おのれ神さび青雲のたなびく日すら小雨そは
降る (卷十六、三八八三)

(30) ……この見ゆる 天の白雲 海神の 沖つ宮辺に
立ち渡りとの曇りあひて 雨も暎はね (卷十八、四二二二)

(31) この見ゆる雲はびこりてとの曇り雨も降らぬか心
足らひに (同卷、四二二三)

些か付言しておきたい。(29)は羈旅歌で留守居の女のうた。(26)や(28)の間答歌は「雨障み」の習俗を背景とするうたであり、逆に「雨隠り」するべき時にもかかわらず、来ぬ男を恋慕して生駒山を眺めているのが(27)の寄物陳思歌である。(29)は越中国歌群の一首。(30)(31)は長い詞書が付されており、それによれば「天平感宝元年閏五月六日より以来、小旱を起こし、百姓の田畝稍くに凋む色あり。六月朔日に至りて勿ちに雨雲の気を見る。よりに作る雲の歌一首短歌一絶」という。これは次作の「雨落るを賀く歌一首」(四二二四)と共に、恐らく海彼の「喜雨」詩賦群を享けて家持が創作した作品であろうと思われるが、仔細は別稿に委ねる。いま、上掲のうたうたをもつて「雲」の表現に通底するところを求めようとするならば、つまるところ自然景としての「雲」であり、いずれも修

辞において「涙」が「雲」となっているわけではないのである。

ならば、坂上郎女歌のうた表現は、どのようにして獲得されたのであろうか。視点を海彼の表現に転じてみよう。

・ 於是事畢功弘、廻車而帰、度三巒兮偃棠黎、天闕決兮地垠開、八荒協兮万国諧、登長平兮雷鼓磻、天声起兮勇士厲、雲飛揚兮雨滂沛、于胥德兮麗万世……

(揚子雲「甘泉賦一首」)

・ 於南則有承光前殿、賦政之宮、納賢用能、詢道求中、疆理宇宙、甄陶國風、雲行雨施、品物咸融……

(何平叔「景福殿賦一首」)

・ 妾在巫山之陽、高丘之阻、且為朝雲、暮為行雨、朝朝暮暮、陽台之下、且朝視之如言、故為立廟、号曰朝雲……(宋玉「高唐賦一首」)

揚子雲(揚雄)の「甘泉賦」は、天子の甘泉宮行幸に従駕した折の作。引用の部分は天子が天地神を祭祀した後、天子周辺の状態を活写した部分である。「長平坂」での天子の打つ雷鼓の轟きのうちに、「雲飛揚雨滂沛」が綴られている。李善は注して「恩沢の多きことを、雲の行きて雨の施るがごとしといふ」(「言恩沢之多、若雲行雨施」と施している。「景福殿賦」は許昌の地に明帝に

よって築かれた殿堂を詠む一作。何晏はあまたの宮殿や講肆の場へと次々に筆を移して、景福殿の壮大な全容を鳥瞰している。右に見る「雲行雨施、品物咸融」とは、「甘泉賦」の表現と等しく、天子の徳業恩沢を意味する結合比喩の表現と見做してよいであろう。ややこれらと異なるのが「高唐賦」である。楚王は高唐に遊覧し、彼の夢のうちに麗婦瑤姬が現われる。そして枕帯を勧めたという。巫山の娘である瑤は、朝夕「雲」となり「雨」となるのである。この巫山瑤姬譚は当時の貴族社会では有名であったらしく、後に江文通(江淹)が「雜体詩三十首」(述哀)のなかで、「雨の絶えては雲を還す無く、華の落ちては豈英を留めんや」「雨絶無還雲、華落豈留英」と詠み、その典拠としている。帝姬女靈(瑤姬)でもない妻が逝去したことを憐んでいるのであるが、江淹のいう「雨絶無還雲」とは「死」を意味しているのである。坂上郎女にとって、こうした表現の二々に触れることにより、比喩としての「雲」の表現方法の数々を学ぶのは、平易であつたと思われる。

次のような諸例は、更に注視しておいてよいであろう。

・ 昏旦変気候、山水含清暉、清暉能娛人、遊子憺忘
暉、出谷日尚早 入舟陽已微、林壑斂暝色、雲霞収
夕霏、菱荷迭映蔚、蒲稗相因依……(謝靈運「石壁精

舎還湖中作一首)

・ 入漱浦余儻何兮、迷不知吾之所如、深林杳以冥冥兮、
乃猿狖之所居、山峻高以蔽日兮、下幽晦以多雨、霰
雪紛其無垠兮、雲霏霏而承宇、哀吾生之無樂兮、幽
独処乎山中、吾不能變心而從俗兮、固將愁苦而終窮
……(屈平「九章一首(涉江)」)

・ 去華輦兮初邁、馬廻首兮旋旆、風冷冷兮入帷、雲霏
霏兮承蓋、鳥俛翼兮忘林、魚仰沫兮失瀨……(潘安仁
「哀永逝文一首」)

一は謝靈運が石壁の精舎から常居へ戻る際、帰路の途
上で詠んだ「石壁精舎還湖中作」であるが、早晨に精舎
を発したものの、巫湖の湖畔に至った頃には既に日没で
あり、薄暮の山水を上述のように描写するのである。駱
鴻凱氏は『文選学』(余論)で「林壑」「雲霞」二云々の二
句を論じて、「上下の語意重複し、亦駢枝(駢拇枝指は無
用のもの意——稿者注)の類なり」と指摘されているが、
それとは異なる意味合いで、小稿で注目したいのも「林
壑斂暝色、雲霞収夕霏」の部分である。次第に暮れよう
とする「雲」の形容表現は八霏(雲)によって捉えられ
ている。次いで、「九章」は言うまでもなく「九歌」と
並ぶ屈原の著名な作品であり、「涉江」はその一篇。氣
高い志を固持しつつ江南に遠く旅する屈原が、理想に叶

う地を発見できぬままに、絶望に拉がれ山野に漂泊する
 伴りである。山は鋭く峻しく溪谷は深くそして暗い。多
 雨のせいで路もぬかる。そうした行旅の辛苦に喘ぐ屈原
 を圍繞するのが、霰や雪が一面に乱れ散る冷地の厳しさ
 である。「雲」は湧き上って天空まで連なり、なびいて
 いると詠う。ここでも「雲」の湧き立つ様子はやはり
 「霏霏」によって形容されている。三の「哀永逝文」は、
 潘岳が亡き妻楊氏を悼んで綴ったものである。亡き妻の
 「嬪」を終え、「喪車」を進めて墓所へ赴く部分を引く。
 「喪車」を進めれば、馬は頭を巡らし葬送の旗がはため
 く。寒風は容赦なく帷の内に吹き込み、そして「雲」は
 湧き起り「喪車」に迫るのである（「雲霏霏兮承蓋」）。

以上に見られる「雲」の形容に注目したい。いま詳し
 く触れ得ないが、「雲霏霏而来迎」（『漢書』揚雄伝）、「雲
 霏霏兮繞余輪、風眇眇震余旗」（『後漢書』張衡伝）などと
 ともに、「雨」の形容△霏△は「雲」が湧き集まりなび
 くさまの△霏△でもあるのである（17）。

四 △霏△の詩想

△霏△——文字として着目するならば、この用字は本
 邦の『懷風藻』にも見られ、紀古麻呂は次のように詠作
 している（『望雪』）。

……浮雲變鬪繁巖岬、驚颺蕭瑟響庭林、落雪霏霏一
 嶺白。斜日黯黯半山金、柳絮未飛蝶先舞、梅芳猶遲
 花早臨……

浮雲は峰岳にたなびき、烈風は庭林を吹き渡っていく。
 古麻呂は、遠景に山嶺を覆い夕陽に黄金に染められてい
 く雪景を配し、近景に白梅の花弁さながらに乱舞する雪
 のさま（蝶先舞）を詠んでいる。『大系』は「雪賦」
 （謝惠連）などの表現に学んでいることを明らかにしてい
 る。(18)もとより、古麻呂の作品はうたではない。それを
 『集』のうた表現としてみる場合、われわれは「霏」か
 ら派生したと覚しい「霏微」を窺い得る。柿本人麻呂作
 歌および人麻呂歌集歌の次のようなたうたを看過する
 ことはできないであろう。

- (32) 山のまゆ出雲の児らは霧なれや吉野の山の嶺に霏
 微（卷三、四二九、「溺れ死にし出雲娘子を吉野に火葬る
 時に、柿本朝臣人麻呂の作る歌二首」その前歌）
 (33) ぬばたまの夜霧は立ちぬ衣手の高屋の上に霏霏ま
 でに（卷九、一七〇六、「舍人皇子の御歌一首」人麻呂歌
 集）

- (34) ひさかたの天の香具山この夕霏霏霏春立つらしも
 （卷十、一八一二、同歌集）
 (35) 古の人の植ゑけむ杉が枝に霞霏霏春は来ぬらし

(同卷、一八一四、同歌集)

右の「霏霰」は卷三の歌巻で人麻呂作歌に見られるところから、人麻呂の用字を保存している例証としてしばしば説かれる表記であるが、卷十の歌巻にあっては更に一八一五、一八一六、一八一七と連続するから、編者はうたそのものよりも「霏霰」の表記に魅かれて一括して纏めたものとも思われる。小島氏は「霏微」の例は六朝時代より少しずつ見出されるとし

・甘雨霏微、猶藏宿霧(梁元帝「謝勅送齊王瑞像還啓」)

・霖霖裁欲垂、霏微不能注(梁沈約「庭雨応勅」)

などが見られ、盛唐以降になればかなり例が多くなるのを指摘されている。そして「霏微」の「微」に雨冠を付して「霏霰」としたのは人麻呂の発明であろうとされるのである。小稿では、坂上郎女全歌における人麻呂作歌あるいは人麻呂歌集歌の占める位置を仔細に検討し得ないが、郎女がこれらのうたうたに触れていたことは恐らく確実であろうし、ましてや「人麻呂の息のかかった」(小島氏)「霏霰」に興味を覚えたであろうことも、じゅうぶん推測できる。ただ、郎女のうたは同じく「雲居たなびく」をうたいながらも、「雲居軽引」と記している。してみると、やや結論めくが、郎女は用字そのものよりも寧ろ八霏Vのかかえる詩想の振幅、即ちその形容

の多様性にこそ、関心を傾けていたのではないか、と思われるのである。形容の多様性とは何か、いま少し海彼の作品に八霏Vの在りようを求めてみよう。

まず降雪の形容は、郎女の身近にあったらう『文選』等にたやすく見ることができる。

・女娥坐而長歌、声清暢而痿蛇、洪涯立而指麾、被毛羽之襪襪、度曲未終、雲起雪飛、初若飄飄、後遂霏霏……(張平子「西京賦一首」)

・自中秋而在疾兮、履霜以踐氷、雪霏霏而驟落兮、風瀏瀏而夙興、霑冷冷以夜下兮、水濼濼以微凝……(潘安仁「寡婦賦一首」)

・谿谷少人民、雪落何霏霏、延頸長嘆息、遠行多所懷……(曹操「苦寒行」)

「西京賦」の未央宮から始められる帝都王宮の描写は、朝堂、温調殿、玉台、昆徳台、更に後宮の処々へと連続していく。そして、その後に張衡は昆明池での遊覧、平楽館での「百戯」の模様を綴っている。伎人の扮した女娥や洪涯の歌舞のうちに、雲が涌き起こり雪が飛び散り、やがて次第に降りしきる(「後遂霏霏」)ようになるという。潘岳の詠じる悲劇の「寡婦」は任子咸の妻楊氏。仲秋の頃から亡夫の喪に服し、時節は移り霜が降り氷を踏む冬が訪れる。「雪」ははらはらと降り続き、寒風に吹

きさらされた雨垂れば夜を通して落ち、そして凍てつくのである。寡婦楊氏が「孤女」沢蘭を抱きながら悲嘆する件りに続くのが、右の部分である。最後の「苦寒行」は、古来険しさをもって称せられた「太行山」を越える旅人の苦難を詠む楽府である。旅人を圍繞するのは厳しい冬の風景である。このような作品に見られる「雪」の降る形容が、典拠とする表現の源泉は、『詩』の「昔我往矣、楊柳依依、今我来思、雨雪霏霏、行道遲遲、載渴載飢、我心傷悲、莫知我哀」(小雅、采薇)や「北風其涼、雨雪其雱……北風其喑、雨雪其霏」(邶風、北風)などに存すること、諸注の指摘するごとくであろう。⁽²⁰⁾

こうして中国詩文に見られる入霏Vの修辭に留意しつつ、その在りようを更に求めれば、「駱駝縱橫、煙霏雨散」(劉孝標「広絶交論」)の「衆多」、⁽²¹⁾「零雪写其根、霏霜封其条」(張景陽「七命八首」)の「霜」⁽²²⁾などを見る。だが、入霏Vの詩想の振幅はそれだけではない。「応刃落俎、霍霍霏霏」(潘安仁「西征賦」)の「魚肉」、「殘朱猶曖曖、余粉尚霏霏」(沈約「詩三首」)の「化粧の粉」、時代を下れば「金壺半傾芳夜促、梁塵霏霏暗紅燭」(楊衡「白紵辭二首」『楽府詩集』)の「塵埃」などを、派生させていくのである。わけても、坂上郎女歌の表現を合わせ考える場合に看過し難いのは、次のような表現である。

・ 田家樵採去、薄暮方來歸、還聞稚子說、有客款柴扉、
儻從皆珠玑、裘馬悉輕肥、軒蓋照墟落、伝瑞生光輝、
疑是徐方牧、既是復疑非、思旧昔言有、此道今已微、
物情棄疵賤、何独顧衡闈、恨不具鷄黍、得与故人揮、
懷情徒草草、淚下空霏霏、寄書雲間鴈、為我西北飛
(范彦竜「贈張徐州謾一首」)

徐州刺史の張謨が任地に赴く間際、旧友范彦竜(范雲)のもとに別れを告げに訪れたが、家を留守にして野良へ出ていた范雲は逢うことができなかった。帰宅してそれを知り、饑宴をも設けることのできなかった心残りを詠うのである。范雲はいう、旧情を軽んじる風紀が一般の間において、何故に張謨は自分の苦屋を訪れてくれたのであろう。張の去った今、心残りなのは鷄を潰し黍を使って細やかな惜別の酒盛りをすることすら叶わなかったこと、嘆きを胸に抱きながらなすすべなく憂えていると、ああ甲斐もなく涙がはらはらと落ちる、と。「贈張徐州謾」もまた、既に去り徐州へと赴き范雲とは隔絶した地に居る張謨に、己が情を伝えようとする贈詩である。范雲は惜念の情を蘇武故事に托して張謨に書き送るわけであるが、范雲の「涙」が垂れるさまは、まさに「霏霏」によって形容されるのである。頬を流れる「涙」もまた入霏Vなのであった。「雲」も「涙」も、由来「雨」

の形容であるハ霏Vの詩想として通底するのが明らかとならう。

五 結 び

ふたたび繰り返せば、坂上郎女は尼理願の死に遭い、遠く有間の地にある石川命婦に、己が情を次のようにうたい訴えるのであった。

言むすべ せむすべ知らに たもとほり ただひと
りして……嘆きつつ 我が泣く涙 有間山 雲居た
なびき 雨に降りきや

こうした郎女歌の表現の根底に、縷説してきたハ霏Vの詩想を看取することはできないであろうか。もとより、引用してきた諸作品の一端が、そのまま直接的に坂上郎女のうたと連接すると断案をくだすわけではない。寧ろ述べきたった作品に限らず、今日伝わらない佚名詩文を含めたハ霏Vの詩想をとる海彼の表現の累積が、郎女の作歌志向の一斑、即ちうた表現の獲得を可能にしたのではないか、と思われるのである。

周知のように、われわれは所謂万葉女流歌人と呼ばれる他の歌人たちと同様に、坂上郎女に具体的な漢詩文の断章をも見ることはできない。とはいえ、天平万葉歌のうたうたの多くは、多かれ少なかれその表現にハ海彼性V

を孕んでいるはずであり、ましてや旅人、憶良らを周辺にしつつ、郎女のみがひとり海彼の文学作品に疎く、それらに親しむことがなかったと想定するのは難しい。しばしばいわれるように、当該歌がハ文芸意識V或いはハ社交性Vを多分に帯びている作品であるといひ得るならば、それはただしく郎女のもつ「知性の明らかさ」であらう。そして、その「知性の明らかさ」の一偶を支えるのは、他ならぬ海彼文学の享受によるものであった、と考えられるのである。²³⁾

坂上郎女のうたうたの処々に、和漢兼才の可能性を求めようとするのは、果して謗言に値するであろうか。

注(1) 『評釈』はその原因にも言及して、「このことは、作者の女性であることと、時代の生活気分より来てゐる」という。

(2) 『私注』は、一二の対者だけを眼中に置いて作歌されていると同時に、理願来朝の叙述のあるところから、「一般の理解玩賞にも堪へる用意を以て製せられたもの」として、結局それが「どっち付かず」に終わったと評している。

(3) (a)(b)の部分の理願来朝の部分は、石川命婦もじゅうぶん承知のことからであって、触れる必要もない件りであるともいえる。しかし、およそ坂上郎女の作品がハ書簡Vではなく哀傷のハうたVであるからには、不可欠の部分であつ

たと解するべきである。「親族兄弟、なき国に、渡り来まして」を中心として、当該歌は八行路死人V挽歌の線上で読めそうであるが、今は触れない。

- (4) 阿蘇瑞枝氏「大伴坂上郎女」『万葉の歌人たち』(シリーズ古代の文学1) 所収。

- (5) 梶川信行氏「大伴坂上郎女の『悲嘆厄理願死去作歌』の論——「挽歌」の位相——」語文58号。

- (6) 『集』中

・吾手本、将巻跡念牟、大夫者、変水定、白髮生二有

(巻四、六二七)

・白髮生流、事者不念、変水者、鹿糞藻闕二毛、求而将行 (同、六二八)

の「変水」を、「恋水」(西本願寺本)に従い、仙覚旧訓に従えば、義訓として「ナミダ」となり一例として加えられもするが、諸注の訓に従って引用例として数えない。

- (7) 草木類のうち「梅花」がうたの素材となるのは圧倒的に第三期天平万葉時代である。このことを詳らかにするのは、川口常孝氏「花の流れ」(『万葉歌人の美学と構造』)の論であるが、梅花歌群が海彼文学の受容によることは、辰巳正明氏「天平の歌字び」「落梅の篇——楽府『梅花落』と大宰府梅花の宴」(『万葉集と中国文学』)で論じられている。拙稿「園梅の景——梅花宴歌と梅花落——」(古代文学22号)でも述べた。

- (8) 小島憲之氏「万葉集と中国文学との交流」『上代日本文学』

学と中国文学』(中巻)。

- (9) 『玉台』で(A)群の表現例は各巻それぞれ、巻一7例、巻二6例、巻三3例、巻四5例、巻五5例、巻六8例、巻七4例、巻八6例、巻九8例、巻十6例を数え、全巻にわたって見ることができる。

- (10) 「四愁詩」は六朝貴族官人の文芸圈にあって「昔張平子作四愁詩、体小而俗、七言類也、聊擬而作之、名曰擬四愁詩、其辞曰」(傳玄「擬四愁詩四首并序」)と評されつつも流行したようで、張載にも「擬四愁詩四首」「玉台」がある。

我所思兮在南巢。欲往從之巫山高。登崖遠望涕泗交。我之懷矣心傷勞。佳人遺我筒中布。何以贈之流黃素。願因飄風超遠路。終然莫致增想慕。(第二首目以下略)

この作品もまた、地名と物象、事象を換えるだけで、その表現構想は同じである。「涕泗交」は「頽」「漣」「流」と変化するのみである。

- (11) 『文選』所収の序に、「……時天下漸弊、鬱鬱不得志、為四愁詩、依屈原以美人為君子、以珍寶為仁義、以水深雪霧為小人、思以道術、相報貽於時君、而懼讒邪不得以通」とある。

- (12) 巻十九に見える「雜体」

沖つ波 荒れのみまさる 宮のうちは 年経て住みし
伊勢の海人も 舟流したる 心地して 寄らむ方なく
かなしきに 涙の色の 紅は われらがなかの 時雨

にて 秋の紅葉と 人々は おのが散り散り 別れな
ば……

も好例。本文引用の駿河采女のうたは、『古今』の(イ)歌との類似を見せるものの、駿河采女歌にあつては未だ「涙川」が表現として獲得されていないのは、留意しておいてよいであろう。

(13) 詩文とはやや表現の性格を異にするが、『洛陽伽藍記』(巻一、「城内・永寧寺」)に「發言雨涙哀不自勝、群胡慟哭声振京師」と見える。

(14) 「涙」「雲」「雨」の関係は、先に早川恵子氏が論じられている(大伴坂上郎女の挽歌について——表現上の特色をめぐって——「国文学研究5号」)。早川氏は「液体からの連想である」とされる。

このあたりについて示唆にとむのは、伊藤博氏「抜け風の源流」(『万葉のいのち』)で、「嘆きつつますらをこの恋ふれこそ我が結ふ髪の潰ちてぬれけれ」(巻一、一一八)を論の始発として、「霧」を人間の「嘆き」の表象とみる発想が普遍のものとしてあつた、と論じられている。伊藤氏も論中引用されている記歌謡「……山廻の、一本薄、項傾し、汝が泣かさまく、朝雨の、霧に立たむぞ……」(記四)は、郎女歌の表現に近い。郎女の作品がなによりへうたVである以上、そうした伝統的表現を一方で継承していることは肯首するべきであろう。ひるがえってみれば、(a) (d)のいずれの部分にも「里家は、さはにあれども」「い

かさまに、思ひけめかも」「言はむすべ、せむすべ知らに」など、人麻呂歌を想起させるうた表現をとっている。本歌が伝統的表現とどのように絡むかについては、別稿で論じたい。

(15) 「雲」によって己れの訴えを伝えようとする側面のみを取り出せば

・風雲は二つの岸に通へども我が遠妻の言を通はぬ

(一五二一、憶良)

・あしひきの 山川隔り 風雲に 言は通へど 直に

逢はず 日の重なれば… (四二二四、家持)

・み空ゆく雲も使ひと人はいへど家づと遣らむたづき知らずも (四四一〇、家持)

・今、風雲に勅して、徴使を發遣す。早速に返報せよ、延廻すべからず (池主の来贈書簡)

など。「雲」についての通観は、たとえば土居光知氏「古事記」における詩的心象」「万葉集」における詩的心象の流転」(『古代伝説と文学』) 参照。

(16) この作品が「悼亡詩」「悼亡賦」とともに潘岳の代表作として、奈良時代の貴族官人たちに頻りに読まれていたであろうことは、既に詳細に説かれている。辰巳氏「人麻呂挽歌と哀傷詩文」「潘岳の『寡婦賦』と泣血哀慟歌」など(注⑦)と同書。拙稿「死児哀傷——『哀』の文学としての憶良『古日の歌』」(『上代文学48号』)でも触れた。

(17) 『広雅』(釈訓)に「霏霏雨(雪)也」とある。

(18) 小島氏『新撰万葉集』の詩と歌」(『古今集以前』)も参照。

(19) 小島氏「万葉集の文字表現」注(8)と同書。

(20) のち『楽府詩集』(横吹曲辞)では「雨雪」は楽府題としてみえる。そこでも「長城飛雪下……霏霏千里深」(陳・後王)「天山一丈雪、雜雨夜霏霏」(唐・李端)など△霏▽の例が挙げられよう。

(21) 李善注は「煙霏雨散」に陸機「列仙賦」より「騰煙霧之霏霏」を引くが、現行『陸士衡集』には見えない。

(22) 李善注に「毛萇詩伝曰霏霏雪貌也、霜亦雪類、故通言之」を引く。

(23) 坂上郎女に見る中国文学享受のありようは、拙稿「大伴坂上郎女論——歌発想の一基盤——」(『文学・語学88号』)、「怨恨歌論(承前)」(『国際経済大学論集18巻34合併号』)などで述べた。

〔付記〕

小稿の骨子は昭和六十三年五月の上代文学会大会(新潟大学)で、「大伴坂上郎女歌と中国文学——『悲嘆厄理願死去作』歌の一表現について——」と題して、口頭報告したものである。